

涅槃会の始まりの地

糸野遺跡（有田川町糸野）

建仁元年（1201年）、明恵上人は、約2年間を過ごした筏立（有田川町歓喜寺）から湯浅宗光の招きに応じて糸野の地へと移りました。

明恵上人が糸野で活動拠点とした場所は、史料によると「糸野館内成道寺後」と記されています。この記述から、湯浅宗光は自身の館の中に成道寺と呼ばれていた寺院を構え、その後、草庵を用意して、上人と弟子たちを迎え、学問や修行生活を支えていたと考えられます。

湯浅宗光の糸野館は、現在の成道寺とその西側一帯に存在したと推定されています。現在の成道寺周辺には、明恵上人の記録にも登場する春日神社が今も祭られている他、大門池や堂屋敷、西ノ坊などといった館や寺院に関連した地名も数多く残されています。春日神社の南にある堂屋敷と呼ばれる場所には、現在も8個の礎石が残り、本堂跡とも考えられています。

明恵上人たちが過ごした糸野の草庵は、糸野館からは少し離れた場所であり、現在の成道寺から北西に250mほど行った丹生池の近くにあり、石造の卒塔婆が建てられており、糸野遺跡として国の史跡に指

定されています。

明恵上人は、糸野の地で宗光の妻の持病を治すためにたびたび祈禱を行いました。また、産後に容体が悪化した宗光の妻の危機を救ったことから、宗光夫妻はますます上人への帰依を深めていったようです。

明恵上人が初めて本格的な涅槃会を行ったのも糸野の地でした。涅槃会とは釈迦の入滅の日である2月15日に行われる法要で、釈迦を父と慕う明恵上人にとっては特に大切な行事でした。上人は、草庵の傍らの大木を菩提樹（釈迦がその樹下で悟りを開いたとされる木）に見立て、その下に石を重ねて釈迦が悟りを開いたときに座っていたとされる金剛座とし、そのそばに卒塔婆をたて、木に泣く泣く水をかけて供養したとされます。この涅槃会には湯浅宗光をはじめとした湯浅一族だけではなく、有田郡内の一般庶民を含む数百人もの人々が集まって法要に参加したと記録されています。明恵上人の糸野における修行・修学の日々は、元久元年（1204年）までの約3年間続きました。

※糸野遺跡は、6月2日の豪雨による被災のため、見学することはできません。



国指定史跡 糸野遺跡